

29年度 学費平均額

学部系統別に初年度納入金の平均額を算出！

旺文社 教育情報センター 平成29年8月18日

志望校を選定するとき、どうしても避けて通れないのが、学費の問題だ。大学というのは人生の一通過点に過ぎない。その先のライフ・プランをある程度想定しておくことは必要で、そのためにも大学進学にかかる費用は知っておきたい。

しかし、各大学の学費を見ても、それが高いのか、低いのかわかりづらい。そこで、だいたいの平均額を理解しておくことが重要になってくる。

実は、一口に大学の学費と言っても、国公立大別でその金額は大きく異なっている。私立大は大学によってさまざま、公立大は同じ大学の中でも地元出身かどうかで別々の金額が設定されていることが多い。

旺文社では進学情報誌『螢雪時代 8月臨時増刊』（7月14日発売）において全国の大学を対象に調査を行い、本年度（29年度）の学部系統別の初年度納入金平均額を算出した。これらを参考に、早い段階で志望校のおおまかな学費を想定しておこう。

【初年度納入金とは…】

入学金や授業料、施設費、実習費、諸会費等、1年次に支払う学費全体のこと。

●国立大はどこでもほぼ同額

国立大に関しては、入学金と授業料は文部科学省の決めた標準額の20%増を限度に、各大学が決定することになっている。

文部科学省令で定める29年度の「標準額」

【昼間部】	入学金	282,000円
	授業料	535,800円
	初年度納入金	817,800円
<small>（入学金と授業料の合計金額）</small>		
【夜間部】	入学金	141,000円
	授業料	267,900円
	初年度納入金	408,900円
<small>（入学金と授業料の合計金額）</small>		

29年度の国立大は、どの大学・学部も文系・理系を問わず、標準額のとおり設定している。基本的に必要な学費は入学金と授業料だが、そのほかに学友会費・学会費、学生教育研究災害損害保険料などが任意徴収される。芸術系では、実習費が必要な場合もある。

●公立大は地域内か地域外か、私立大は学部系統で大きく異なる

公立・私立大学部系統別 初年度納入金平均額(円)

学部系統	公立大 地域内			公立大 地域外			私立大		
	入学金	授業料	初年度納入金	入学金	授業料	初年度納入金	入学金	授業料	初年度納入金
文学部	219,694 ↓	535,753	791,185 ↓	355,293 ↓	535,747	930,922 ↓	235,287 ↓	771,020	1,292,249
外国語学部	207,563 ↓	518,119 ↓	784,746	362,047 ↓	516,940 ↓	941,679	237,245 ↓	762,218	1,292,750
人文・教養・人間科学部	217,562	517,034	794,465	365,033	515,644	945,561	236,864 ↓	783,552	1,305,954
教育・教員養成系学部	238,673	537,091 ↓	833,088	382,840	537,220 ↓	982,651	243,211 ↓	771,798	1,339,261 ↓
法学部	189,731	533,492	779,641	351,367	533,300	943,012	227,371 ↓	743,969	1,227,095
経済・経営・商学部	214,871	541,565	815,587	366,631	541,925	969,896	227,826 ↓	748,586	1,250,235
社会・社会福祉学部	212,771 ↓	540,218	806,071	356,764	540,352	952,423	238,996 ↓	771,806	1,307,983
国際関係学部	214,280 ↓	541,272 ↓	817,399	367,375 ↓	541,500 ↓	974,147	230,253 ↓	797,287	1,310,293
理学部	228,855	535,418	805,844	371,467 ↓	535,400	951,386 ↓	239,539 ↓	984,341	1,564,171
工学部	212,885	530,094	791,728	353,370	529,921	933,376	240,498 ↓	1,024,024	1,604,690
農・獣医畜産・水産学部	241,836	535,800	811,533 ↓	382,218	535,800	951,915 ↓	251,250 ↓	947,344	1,635,561
医学部	250,625	540,450	928,473	555,571	541,114	1,232,284	1,312,903	2,690,806 ↓	7,291,810 ↓
歯学部	282,000	535,800	817,800	520,000	535,800	1,055,800	600,000	3,148,824	5,330,706
薬学部	221,750 ↓	535,800	851,063 ↓	383,650 ↓	535,800	1,012,963 ↓	329,859	1,410,651	2,160,518
看護・医療・栄養学部	227,618	536,446	826,264	386,344	536,489	984,893	269,439 ↓	975,542	1,700,224
家政・生活科学部	224,667	539,857	830,120	391,305 ↓	539,857	996,758	245,762 ↓	786,947	1,382,778
体育・健康科学部	236,800	552,840 ↓	854,072	382,760	552,840 ↓	1,000,332	244,123 ↓	808,603	1,399,678
芸術学部	232,826	537,070	822,278	393,819	537,190	988,380	244,252 ↓	991,995	1,615,638

※夜間を含む。

※公立大で地域内・外の区分がないところは地域内に含む。

※入学金と授業料は内訳として表示。そのほか実習費等を合計したものが初年度納入金となる。

※大学によって別途徴収する後援会費等は含まれていない。

公立大は、授業料に関しては、大半が国立大と同じに設定している。入学金は大学ごとに幅広く、地元出身者には低く設定しているところが多い。上の表の「地域内」が地元出身者を対象にした金額、「地域外」がそれ以外を表しているが、同学部系統での地域内・外の差は14万～17万円程度あり、医学部・歯学部系統のみ、差が大きくなっている。

一方、私立大では、大学・学部などによってさまざま。特に、学部系統によって大きく異なっており、初年度納入金平均額がもっとも低い法学部ともっとも高い医学部では、約606万円もの差がある。平均額は、高い順に「医→歯→薬→看護・医療・栄養→農・獣医畜産・水産→芸術→工・理→体育・家政→文系学部」となっている。学費の高い系統は主に、実験や実習があること、そのための専用の施設が必要であること、また、芸術系統などでは少人数や個別の指導が行われることなどが影響している。

●私立大のほとんどの学部系統で、初年度納入金平均額が昨年比アップ

次に、公立大・私立大それぞれに関して、平均額の昨年比を見てみよう。上の表で、下向きの矢印が昨年比ダウンを示している。

公立大の初年度納入金は、地域内・外ともに、文・薬学部で大きくダウン。文学部は授業料アップ、薬学部は昨年同だが、どちらも入学金がダウンし、結果、初年度納入金はダウンとなった。また、地域内・外ともに農・獣医畜産・水産、地域外では加えて理も、ややダウン。他の学部については、歯学部を除いて、すべてでアップしている。

私立大では、ほとんどの学部系統で入学金がダウンしたが（薬学部は昨年同）、一方で、授業料は高くなった。授業料のアップが響き、結果として、初年度納入金はアップした。例外として、教育・教員養成系学部では他の多くの学部と同じ変化をしているものの、入学金の下がり幅に対して授業料はそこまでアップせず、初年度納入金はダウンした。

私立大医学部に関しては、他の私立大の学部と異なる動きをしている。入学金は高くなっているものの、授業料が低くなり、その下がり幅が大きく、初年度納入金はダウンした。なお、歯学部については、公立大地域内・外、私立大ともに、入学金・授業料・初年度納入金すべて昨年同となった。

●同じ学部系統でも、分野によって学費は大きく異なる

ここでひとつ注意したいのが、前ページの表は 18 の「学部系統」別の学費平均額だということ。

旺文社では、学部系統をさらに細かく 70 の「分野」に分類している。分野別に学費平均額を見てみると、ひとつの学部系統のなかでも、大きく異なるものがある。たとえば、私立大の「農・獣医畜産・水産学部系統」を見てみよう。同系統でも、「獣医学」と「水産学」の初年度納入金平均額には約 70 万円の開きがあるのだ。

次のページに、公立・私立大別、分野別の、初年度納入金平均額を掲載した。より詳細に学費を知りたい方は、こちらも併せてご覧いただくのがよいだろう。



学費を調べるとき、授業料などのひとつの項目だけを見て、「高い」「低い」と一喜一憂してしまいがちだ。しかし、実は授業料に含まれない他の必要経費があり、“学費”と思っていたものが実際に必要な金額とは大きく異なっていることもある。一項目で判断せず、初年度納入金全体をしっかりと確認することが重要だ。また、初年度納入金全体が高かったとしても、その理由が少人数教育だったり、施設・設備が充実していたりする場合も十分にある。教育内容と比べて判断することも必要だ。

なお、これまで述べてきたことはあくまで学費の平均額についてであり、個々の大学の実際の学費については、『螢雪時代 8 月臨時増刊』をご参照いただきたい。

